

第2節 音楽を取り入れた授業の創造

1 歌詞の教材化

本節では、中学生・高校生が日ごろ身近なところで接している音楽を取り上げて、国語科の教材開発および授業開発という観点からその可能性を追求してみたい。音楽は、学習者にとってきわめて身近な素材である。彼らは日常生活の中で、自然に音楽に親しんでいる。音響面で優れた性能を誇る機器が次々と開発され、音楽をよい音環境のもとで鑑賞できるようになった。音楽への関心は、聴くという側面ばかりではない。カラオケがブームになって、彼らの「遊び」の場所の中には定番としてカラオケボックスが含まれている。文化祭などで、バンドの演奏を披露するグループもある。このような音楽に対する関心を、国語科の授業に向けてみたいという思いが、本節の提案の前提となる。

学習者がよく聴く音楽は、クラシックよりはポピュラーであり、その多くは歌詞が付いたものである。そこで音楽と国語科の接点を考えるときに、直ちに思いつくのはうたの歌詞ということになる。歌詞は、詩歌と同じ位相から教材化を検討することができる。現に、国語の教科書の中にも歌詞が教材として採録されるようになりつつある。高校の「現代文」の教科書を例にするなら、教材として歌詞が掲載された教科書が複数あった。1989年版学習指導要領に準拠した「現代文」の教科書から3例紹介する。

角川書店版教科書には、中島みゆきの「傾斜」の歌詞が収録されていた。「傾斜」は「文体・表現」という単元に収められ、後に次のような「学習」が付いている。

学習1

- 一 「傾斜」がイメージされている言葉を作品の中から列挙してみよう。
- 二 この歌詞は光景を叙述した部分と、感情を表出した部分（叙情の表出）とによって構成されている。それぞれその部分はどこか指摘してみよう。
- 三 この歌詞には次のような二つのリフレインがあるが、それぞれ表現されている意味を明らかにしてみよう（以下略）。

学習2

- 一 「傾斜」という言葉には何が暗示されているか、考えてみよう。またそれが高らかに歌われてる部分を指摘してみよう。

同じ社の異なる「現代文」の教科書には、ジョン・レノン（高山宏之訳）の「イマジン」が教材化されていた。これは「無限」という単元に収録されているが、その後の「学習」には次の二つの課題が示されている。

- 一 この詞の中で、肯定されているものと否定されているものを、それぞれ抜き出してまとめてみよう。
- 二 「キミはぼくを夢想家だと言うかもしれないけど」（中略）とあるが、「夢想家」と言われる理由を考えてみよう。

三省堂版の「現代文」では、寺山修司の連作短歌28首が収録された単元の「課題」において、短歌に関する二つの課題とともに、次のようなものが置かれている。

- 三 次に示すのは、中島みゆきの作詞・作曲による曲の歌詞の一部を集めたものであ

る。読み比べて、寺山修司の短歌と共通する内容があるかどうか、話し合ってみよう。

この課題に続けて、中島みゆきの「友情」「歌姫」「誘惑」「月の赤ん坊」「熱病」からそれぞれ歌詞の一部が掲載されている。短歌におけるモチーフとの比較という活動が工夫された課題である。

これらの「学習の手引き」の課題は、いずれも「詩歌」の課題と差異はない。曲から独立したものとして「歌詞」をとらえ、それを読むという活動を国語科の学習として位置付けたものである。このように、学習者が日ごろから親しんでいるうたの歌詞を独立させて、詩歌と同様の「読むこと」の教材として扱うことができる。さらにわたくしは、実際に歌手の歌ううたを教室で紹介して、歌詞のみを読んだときの印象と比較するという活動を加えたいと思う。教科書に収録された歌詞に倣って、いま学習者が聴いているうたの歌詞に、効果的な「学習の手引き」を検討して教材化を工夫することは、国語教育の一つの方略である。

さらに『日本語学』（明治書院）に連載された伊藤雅光「ユーミンの言語学」のように、歌詞を日本語学の方法によって多様な切り口から分析するという方向も取り入れることができる。たとえば、あるうたの歌詞を紹介して、その歌詞に出てくることばを単語に分けて、特にどのようなことばが多く用いられているかを調査するという課題を設定する。いま話題の歌手のうたを取り上げると、学習者は関心を持って課題に取り組む。ヒット曲の歌詞を分析して、どのような語彙が多く用いられているか、特に目立つことばの特徴はどのようなことか、などを考える。そこから得たデータをもとにして、何故そのうたがヒットしたのかを話し合う。以上のような授業は国語科の活動として適切なものと言えよう。

2 音楽論の教材化

続けて、「読むこと」の教材として音楽に関わる論説を取り上げることについて言及する。古典的な音楽論よりも、学習者に身近な現代の音楽を扱ったものが望ましい。わたくしは、佐藤良明の「安室奈美恵への道—日本のうた試論」¹を教材化した。佐藤の論は、日本のうたの歴史を辿りながら、「J（和）」「E（洋）」「B（黒）」のそれぞれの要素がどのように関連しているかという問題を具体的なうたに即して分析したものである。この文章を扱うためには、いくつかのCDをテープに編集したり、ハーモニカや小型のキーボードを用意したりという準備が必要になる。授業には、編集したテープといくつかの楽器を用意して臨むことにする。筆者はこの文章の中で、様々な具体例を掲げている。楽譜が引用されている箇所については、担当者がもし楽器をたしなむことができるなら、その楽器で実際に音を紹介するという配慮が教材の理解を促すことになる。

この文章を教材化した理由の一つは、学習者が関心を寄せていた小室哲哉のうたが取り上げられているからである。あらかじめ編集したテープを教室で紹介することによって、教材の理解は深まり、学習者の教材への関心を喚起することができる。その一例を挙げると、安室奈美恵が歌う「Can You Celebrate?」と「A Walk in the Park」の次の箇所が文章の中で話題になっている。

永遠という言葉なんて 知らなかったよね(Can You Celebrate?)

思いが届けば それから答えが欲しくなる(A Walk in the Park)
これらの曲の特徴を分析して、佐藤は次のような指摘をしている。

このマイナーとメジャーの交差するところが、最近の「小室＝安室節」のパターンになっているようです。

この指摘は、実際に教室で安室奈美恵のうたをテープで紹介することによって、学習者によく理解させることができる。特に「マイナーとメジャーの交差するところ」の意味は、曲を聴かないと分かりにくい。

同じ佐藤良明の著した『J-POP進化論』(平凡社、1999. 5)では、宇多田ヒカルの「Automatic」が取り上げられている。この文章を教材化した際にも、授業で実際に曲を聴くという活動を通して論旨を把握するという方法を取った。

このように、音楽に関わる論説文を扱って、授業において文中で話題になっている曲を紹介することは有効に機能する。「音楽」との関連指導、さらに音楽担当者とのTTという方法等も含めて、今後より効果的な授業開発の余地がある。

3 音楽によって広がるイメージ―「癒し」の店をデザインする

国語科の教材として取り上げる音楽としては、一つに「J-POP」と称されるジャンルがある。これは歌詞があることから、その歌詞自体を詩教材として扱う授業が工夫できる。2001年4月から5月にかけてのNHKの「人間講座」に、ねじめ正一の「言葉の力・詩の力」があった。講座ではねじめが注目する15人の詩人の詩について、それぞれのことばの世界の特質が語られ、最後に椎名林檎と宮沢和史というシンガーソングライター作品が取り上げられた。ねじめは、二人のシンガーソングライター作品のことばを、詩人の詩と同じ位相から話題にした。音楽の教材化を試みる際には、ねじめ正一の講座のように、まず歌詞を読んでそのことばの特色を考えるという活動から授業を展開することができる。次にその一つの具体例を紹介したい。

わたくしは早稲田大学系属早稲田実業学校の高校3年生を対象とした1997年度の「国語表現」の授業で、以下のような実践を展開した。この「国語表現」の授業は大学への進学が内定した学習者を対象としたもので、配当した時間は1時間である。

教材として中島みゆき作詞作曲の「パラダイス・カフェ」(アルバム『パラダイス・カフェ』に収録)、参考資料として西岡文彦の「ワークショップ⑥・店を編集する」²を用いることにする。指導過程の概要を以下に示す。

① 参考資料「店を編集する」を参照して、「店」をデザインする方法を理解する。

資料には、一つのコンセプトを決めたうえで、そのコンセプトに即した店舗のデザインを考えるというワークショップが紹介されている。資料を参照して、店のデザインという課題に対するイメージを持つことができる。

② 「癒し」の場所としての「パラダイス・カフェ」という「店」を、次のような段階を追って想像しながら、ことばによって表現する。以下、発問と学習者の回答例を示す。

i あなたの「パラダイス・カフェ」はどんな所にありますか？

《例》都会の中のエキゾチックな街並みの中に、周囲と調和したたたずまいでさりげなく建っている店。静かな湖畔にひっそりと佇んでいる、小さな城のような感じの店。

ii あなたの「パラダイス・カフェ」の外観および内装のイメージは、どのようなものですか？

《例》外観は、新宿の高層ビルの最上階にある、ソフィスティケートされた感じの店。内装は、白と青を基調とした、海を思わせるインテリアの店。

iii 店の広さやテーブルの配置はどうなっていますか？

《例》カウンターのほかに、四人掛けのテーブルが四つ程度の小さな店。中央に広い空間があって、周囲にテーブルがたくさん置いてある感じの広い店。

iv 主なメニューを紹介してください。

《例》トロピカル・シャーベット。カクテル・スイートハート。

「パラダイス・カフェ」ということばから、学習者はそれぞれの店のイメージの連想を始める。特に i から iv へと段階を追うことで、次第に連想を深めることができる。それぞれ「授業レポート」にまとめるわけだが、途中適宜発表によって仲間のイメージを確認できるように配慮した。

③ 中島みゆきの「パラダイス・カフェ」の歌詞と曲を鑑賞して、その曲の中の「パラダイス・カフェ」の情景を想像する。中島みゆきの店と自分で想像した店とイメージの比較を試みる。研究資料として、中島みゆきの「パラダイス・カフェ」の歌詞を掲げ、あわせてテープで曲も紹介する。

④ 歌詞の中の表現の一部を空白にして、その中に自分でイメージした「パラダイス・カフェ」の情景を当てはめてみる。

中島みゆきの「パラダイス・カフェ」のサビに相当する箇所には、次のようなリフレインがある。

ここはパラダイス・カフェ 夜明けまで色とりどりの客が
みんなパラダイス・カフェ テーブルの向こうに見る甘い夢
ここはパラダイス・カフェ 夜明けまで悩みのない客が
みんなパラダイス・カフェ テーブルの向こうに見る甘い夢

この箇所の一部を空欄にして、次のようなフレーズを示す。

ここはパラダイス・カフェ ()
みんなパラダイス・カフェ ()
ここはパラダイス・カフェ ()
みんなパラダイス・カフェ ()

この空欄に、自分のデザインした「パラダイス・カフェ」のイメージを短くリズムカルなことばを入れることによって表現させる。

⑤ 創作した詩を中島みゆきの曲に合わせて歌ってみる。

「パラダイス・カフェ」の曲では、最後にこの箇所の演奏のみが繰り返して流れる。それにあわせて歌ってみるよう働きかける。

この授業では、一人ひとりの学習者の想像力を必要とする。想像したイメージをことばで表現し、具体的な形を与えていく。その過程は高校生にとって楽しく充実した作業である。後半の課題は5音7音のリズムカルな形式の中に、想像したイメージをはめ込む作業、さらに声に出して歌うという身体的な活動になる。「いかに表現させるか」という課題に応えるための工夫の一つとして、このような音楽を用いた授業を工夫することができる。

中島みゆきに関連した教材として、中島による作詞・作曲の「地上の星」と「ヘッドライト・テールライト」の2曲を用いた実践を展開できる。まず2曲の歌詞を読んで表現上の特色を指摘し、作品全体のイメージを文章にまとめる。それぞれ発表させて、クラス内での交流を実施してから、今度は曲を紹介して、歌詞のみを読んだ段階のイメージと曲を聴いた段階のイメージとを比較して、感じたことや考えたことを文章にまとめさせる。歌詞のことばは、曲を付けて歌われることによって、また新たな要素をもって立ち現れる。学習者は曲とともに歌詞が歌われるのを聴くことに慣れているために、歌詞のみを読んでそのことばに着目するという活動、さらに後で曲を聴いた印象と比較するという活動は新鮮なものとして受け止める。

なおこれら二つの作品は、NHKの「プロジェクトX」という番組のテーマソングとして作曲されたものである。特に「ヘッドライト・テールライト」はいわゆるエンディングテーマの曲となっている。そこで授業では、続いてこの「プロジェクトX」という番組の内容を想像するという課題へと展開する。実際に番組を視聴したことがあれば、具体的な番組のイメージを持つことができるわけだが、多くの学習者が見ているわけではない。そこで二つのテーマソングを参考にして、この番組が具体的にどのような内容になっているのかを想像させる。想像したことを文章にまとめて発表させ、最後に実際に番組を見たことがある学習者がコメントをする。参考にNHKのホームページから「プロジェクトX」関連の内容を取り出してプリントアウトしたものを、資料として配布する。テーマソングから番組の内容を想像するという試みは、学習者が興味を持って取り組むことができる。

4 声でつなぐ音楽と詩歌

音楽を取り入れた授業を検討する際に、「声」の活動に注目することができる。いまや教室から「声」が失われつつあり、特に学年が進むに従って学習者の身体から声が出なくなっていることは深刻な問題である。特に高校生に対して効果的な「声」の活動を生かした授業を展開するのは、決して容易なことではない。「声」を発するもとなる身体そのものが、固く閉ざされているからである。では彼らの身体から声を引き出すには、どのような手だてを講じたらよいのだろうか。この点に関しては、竹内敏晴の「話しかけのレッスン」³など、参考にすべき試みがある。ここでは音楽との関連から突破口を開いてみたい。

学習者の多くは音楽に親しんでいる。1993年7月に、授業を担当する早稲田実業学校の高校1年生133名に音楽に関する簡単なアンケート調査を実施してみた。日常生活と音楽との関係について、4つの選択肢を設けて尋ねたが、結果は次のようなものであった。なお、カッコ内の数字はパーセントを表す。

- ① 音楽をよく聴く (80.4)
- ② たまに聴く (14.3)
- ③ あまり聴かない (4.5)
- ④ まったく聴かない (0.8)

「よく聴く」と回答した学習者が圧倒的に多かったわけだが、高校生と音楽とのかかわりの深さを察することができる。続いてよく聴くジャンルを尋ねてみると、多くの学習者が挙げた音楽は、ポップス、ニューミュージック、ロックであった。数は少ないが、クラ

シック、フォーク、ゲームミュージック、さらに日本の歌謡曲を挙げる者もいた。

次に自分と音楽との関係について自由に記述させたところ、通学の電車の中で毎日ヘッドホンステレオを聴いているという学習者が多く見られた。また、友人とカラオケボックスで歌うことが趣味と答えた者が複数あった。彼らは常に身近な場所で音楽と関わっている。通学の途中には、ヘッドホンステレオで音楽を聴く。聴くだけではなく、カラオケボックスでは大きな声を張り上げてマイクを握り締め、自分自身の声に酔いしれる。そこには教室とは別人のような高校生の姿がある。そこで、音楽によって彼らの身体を開き、そこから声を引き出すことによって、効果的な授業を実践することを考えてみた。

「国語」と「音楽」とを架橋するものとして、詩歌を考えることができる。詩歌は音楽と同様、リズムを重視する。そこでわたくしは、高校1年生対象の韻文単元に音楽を導入することを考えた。教材として谷川俊太郎の詩を選択する。谷川は、詩における「声」の復権を主張し、詩は観念で読むものではなく身体で読むべきものだと述べる。黙読よりも音読によって鑑賞するのが、本来の在り方ということになる。国語教育との関連では、『あたしのああなたのア』（太郎次郎社、1986. 6）や『子どもが生きる・ことばが生きる詩の授業』（国土社、1988. 6）などから氏の考え方を知ることができる。またアポロンから出ているオーディオ詩集『谷川俊太郎詩集』や、草思社カセットブック『谷川俊太郎、自作を読む』などによって、テープを通して直接氏の考え方を聞くことができる。さらに、NHKで放映された「詩人たちのコンサート」や「ことば、声、からだ」などからは、映像を通して語る詩人の姿に触れることもできる。このような視聴覚資料を用いた授業を、工夫したい。

授業はまず『ことばあそびうた』から入る。谷川の詩に対する考え方を、あらかじめテープとビデオによって紹介する。その後で「ののはな」「いるか」「かっぱ」「さる」の四編を読む。さらに詩集『わらべうた』からは、「ふつうのおとこ」「ゆっくりゆきちゃん」の二編を選んで読む。授業では、これらの詩をまず黙読して感じたことを話し合う。次に各自が音読して、黙読のときとの感じ方の相違を発表する。その後で谷川俊太郎の自作朗読、および波瀬満子の朗読をテープで聞いて、感想を自由に発表する。続けてビデオによって、「詩人たちのコンサート」の映像を見る。さらに、ビクターからCDが出ている新実徳英作曲の合唱曲「いるか」「かっぱ」「さる」の一節を聴いて、原作のイメージと比較する。このようにして詩を読むという活動を、段階を追って音楽に接近させることができる。

授業では、必ず身体で声を出し合って詩の内部に潜むリズムを体得させることにしたい。一通りの学習活動を経た後で、複数の学習者を指名して教室の前方に出す。「朗読」だけではなく、「群読」も適宜取り入れた「声」の授業が始まる。たとえば「いるか」は、二つのグループが相互に声を掛け合って読む。「かっぱ」は輪唱のような形でスピーディに読む。『シリーズ授業②・国語Ⅱ』⁴は「詩と物語をあじわう」というテーマだが、木村久子教諭による小学校1年の実践が収録されている。谷川俊太郎の詩を全身から声を出して読む子どもたちの表情は、生き生きとしていた。身体を動かす活動によって、高校生の教室にもこの活気をたとえ僅かでも漲らせたいためである。

以上のような韻文の授業は、最後に学習者自身によるアンソロジー作成という形に収斂させたい。最も好きな詩歌を1編選択し、それをグループごとに集めてB4判1枚程度のアンソロジーを作る。そこに収録した作品を発表するわけだが、発表は作品の解釈ではな

く、あくまでも朗読が中心となる。BGMを工夫させ、群読もしくは絶叫、さらに曲を付けて歌う方法も奨励する。かくて教室は詩歌発表会の場となり、様々な工夫を凝らした発表で盛り上がる。詩歌は「頭」ではなく「体」で味わうべきものという谷川俊太郎の考え方を、授業の中で具現することができた。このようにして、音楽とからめつつ、徹底的に詩歌と親しむような授業をもっと積極的に導入するべきであろう。

5 歌詞と曲と歌手と

ところで、前項で紹介したアンケート調査では、音楽を構成する次の三つの要素のうち、特にどの要素に関心を寄せて聴くのか、という問いも設けてみた。結果をパーセントで示すと、次のような状況である。

- ① 歌詞 (23. 1)
- ② 曲 (61. 1)
- ③ 歌手 (15. 8)

この結果、高校生は特に「曲」を中心に音楽を聴いていることが分かる。「歌詞」に関心を持つ学習者は、「曲」の約3分の1にすぎなかった。

学習者が日ごろ親しんで聴いている音楽の、特に歌詞の言語表現に関心を持たせるように導く授業は、国語教育として十分成立するはずである。『中島みゆき全歌集』（朝日新聞社、1990. 5）に寄せた谷川俊太郎の解説に、次のような一節がある。

歌はことばの隠している意味と感情を増幅する、あるいは誇張すると言ってもいいかもしれない。だがそうすることで、歌は私たちがふだんとらえ損なっていることばの意味と感情を新しくよみがえらせてくる。メロディとリズムに支えられたひとりの生身の歌い手の声がそれを可能にするのだ。だから活字になった歌のことばは、ある意味ではぬけがらにすぎないと言えるかもしれない。しかしまた音楽と声の助けなしにことばを読むことで、私たちは歌の肉だけでなく、骨格とでもいうべきものを知ることができる。

この指摘は、アンケート調査で尋ねた「歌詞」「曲」「歌手」三者相互の関係を考える際に、参考になる。この解説に基づいて、次のような韻文の授業を工夫することができる。

授業はまず「骨格」すなわち歌詞から入る。教材として、まず中島みゆきの「横恋慕」と「悪女」を選ぶ。それぞれの歌詞をプリントして配布し、作品の中に描かれた主体としての女性について考えさせ、どのような人物として描かれているのかを整理させる。たとえばある学習者は、「横恋慕」の主人公は「失恋してもなお相手を慕う哀しい女性」であると読み、「悪女」からは「悪女になりたくてもなりきれない女性」を読み取った。このような意見をいくつか発表させた後で、中島みゆきの歌をテープで聴いて、歌詞から受けるイメージとの変化に注意させる。すなわち、歌によって「ことばの隠している意味と感情」を「新しくよみがえらせ」ることを目標とした授業を展開するわけである。二つの作品とも、歌詞から受ける暗い感じとは異なり、曲では明るい感じが前面に出て、それがかえって哀しい女心を強調することを学習者は発見する。結びに、二作の女性を比較してどちらの女性により魅力を感じるかを、理由を添えてまとめさせることにしたが、結果は「悪女」を選んだ者が若干多かった。

このような「歌詞」と「曲」をテーマにした授業で、さらに「歌手」の問題をからめて扱うとしたら、同じ中島みゆきの「黄砂に吹かれて」を教材化する。中島の『回帰熱』というアルバムに収録されたこの作品は、工藤静香の歌でもヒットした。そこで中島と工藤の歌をそれぞれ鑑賞させた上で、両者の表現の相違について論述させるという活動が考えられる。

本節の最後に、歌詞の創作という活動を紹介する。坂本九のヒット曲であった「明日があるさ」が、かつて缶コーヒーのCMソングとしてヒットした。元のうたは青島幸雄の作詞だが、CMソングではサラリーマンを主人公とした「替え歌」になっている。新たな歌詞はストーリー性が豊かで、テレビドラマにもなって享受された。そこで、「明日があるさ」の曲に合わせて替え歌を作詞させるという活動を考えることができる。身近な学校生活をテーマにして、彼らは様々な替え歌を巧みに創作する。中学生から高校生まで、どの学年にも導入できる課題である。ある中学1年生は次のような歌詞を創作した。

国分寺にあるキャンパスに／僕らの夢がかがやいている
手をつなごう今日はいいい日／明日もかがやこう
明日がある 明日がある 明日があるさ

このように、身近な曲をもとにして作詞をするという表現活動は、学習者の「書くことへ向かう意志」⁵につながるものである。

詩歌は嫌いだと強い拒否の姿勢を表明する学習者も、歌詞の教材化によってスムーズに授業へといざなうことができる。さらに音楽は約8割の学習者が関心を持っているため、授業に導入するとその効果は絶大なものとなる。詩人の川崎洋は次のように述べている。

詩は本質的には『歌』である。それが音楽に抱かれるとそれまでにない趣をかもしだす。音楽とは何と神秘に溢れたアートだろう。⁶

ここでは特に韻文の単元に、音楽を用いた実践例を紹介した。様々な工夫によって、学習者が音楽と同様に詩歌が好きになればよい。そして、授業を通して学習者国語が好きになったとき、音楽を取り入れた授業の目標は達成されたことになる。

注

- 1 『新・知の技法』（東京大学出版会、1998. 4）に収録。
- 2 『別冊宝島134号・編集の学校』（宝島社、1991. 6）に収録。
- 3 第2章第4節で紹介した。
- 4 『シリーズ授業②・国語Ⅱ・詩と物語を味わう』（岩波書店、1992. 10）による。
- 5 第2章第2節で言及した。学習者が書くことに興味・関心を持って、意欲的に書く活動へと向かう表現意欲を言う。
- 6 『国語通信』（1993. 8）の「歌の詞」という特集に寄せた「韻文のリズムをめぐって」というエッセイによる。